

護する者あらむ耶。

試に地圖を採て之を披見せよ、露國は前後二百有餘年、經營慘憺、尙ほ海軍に於ては非常なる不利益の地に遺留せられたり。英國は世界中何れの海洋にも自由に通達せり。佛朗西は大西洋に面し、而して地中海々岸千四百海哩を保有せり。西班牙は海權振作上、天與の好位置を占有せり。獨逸は北海運河に由り蒼海に出つへき路を把握せり。合衆國は腹背に二大大洋を控ぬたり。日本の地勢は英島國と同じく佳良也。露國は是等諸邦に反し、歐洲に於て數條の水路に由り交通線を有するも、或は陸地の閉塞する所となり、或は氷雪の填塞する所とされり。是れ所謂造化の惡戯にして、露國の不幸之より太甚しきは莫かるへし。而して露國に於ける是等の地理的大不利の結果はクリミア戰役に於て顯はれたり。極東に於て、露國が一六九七年畧取せしカムシヤカは春、夏及び秋の三季僅に四個月間に過ぎず。餘の八個月間は威な冬季に屬す。浦鹽斯德は一八六〇年露領海港となりしも、約四個月間は氷結せられ、碎氷船を用ひ氷結を截解し、通航を便にするも是れ暫時の間に過ぎず。幾むと日本内海の中に位する該港に

して尙ほ且つ然り。最近の讓與に係る旅順口と雖も、プレスト、カヂス、紐育若くは桑港の如く洞然として大洋に開放せらるるの便なく、且つ露都より至近の鐵道線路に由るも、尙ほ四千四百哩強の外に在り。他の方面に出つへき門戸一個所有り、波斯海灣に於けるハンダ爾、アパス港即ち是也。明治卅二年六月上旬の印度「タイムズ」は屢、露國政府と波斯政府との間に一種の協約成立し、該海港の讓與手續正さに行はれんとすと。維也納刊行露國半官報「ポリチッセ、コレスボンデンツ」は其の報道の虚構なることを聲言せり。吾人は爰に其の眞偽を確知するの資料を有せず。惟ふに波斯海灣に出路を覓むるはレシユール氏か彼得大帝の遺志を紹繼して經營せしものに係る。唯オルムス地峽突出せるを以て該海灣より印度洋に通するには極めて不利の地に在り。斯くの如く露西亞帝國が純はら國土の暢張を計らむとするも、西は一八一四年以降普魯西（今の獨逸）及奧地利の爲めに阻まれ、西南は土耳其帝國解體を以て不利と認めたる他の歐洲列邦の爲めに制せられ、竟に勢止むあく方位を轉し、左の四大路に向て進行するに至れり。

- 一、西伯利亞を経て極東に到る。第十七世紀の前半季に方り、極東の海方面に到達せしを以て、爾來海上の交通に由り保助を興ふるの利便あり。
- 二、アラル海よりシル、ダリヤに沿ふてチムケント（一八六四年）、タシユケント（一八六五年）、クルジャア（一八七一年）、コーランド（一八七六年）及びバミール高原（一八九〇年）に到るもの。
- 三、アラル海よりアム、ダリヤに沿ふてキワ（一八七三年）及びボクハラ南境に到るもの。
- 四、裏海よりテケ、チユルコマン地方を経、コラサン境界に沿ひ、メルツ（一八八四年）及びペンジエー（一八八五年）に到るもの。

吾人は爰に露國か現有露領亞細亞を建設するに至りし顛末を詳述せざるへし。其の方法は總ての疆邦、特に大英國か印度及び南阿に於て同一の境遇に採用せしものと大差あかりしと謂ふも不可あし。第二、第三及び第四の進行線に於ては、争闘交起り、而して水流なく人煙稀なる地方に軍隊を行進せしめしを以て、其の窘困の狀想見すへし。英國か印度を征服するや、海上の交通あり及び比較

的に豊沃なる地方に扶植せしを以て、其の利便著大なりしか、露國に至ては然らず、カチーツに於ける自國の踞脚地を保維し、且つ之より商利を致さむとするには、大仕掛の鐵道敷設を遂行せざるを得ざりし也。中央亞細亞鐵道を敷設するに至りし事由は是れに外あらず。該鐵道は裏海よりタシユケンドに到る距離約九百哩のものにして、一八八〇年に起工し一八九六年に竣成せり。該線路は多少缺點あるに拘らず純粹軍事的目的にも使用するとを得へし、而かも該線路が貫通する各地方の商業上の發達を圖るは其の主一の目的也、復た若し該線路敷設せられざるに於ては、濛昧蠻夷の地方のこととて、之を統治、保全するには鉅額の經費を徒消せざるを得ざりしなるへし。

露國の海上權力及び海方面膨脹の點より觀るに、極東方面に直進するの一事は極て重大なる影響を生ずへし。純粹なる軍事上の窘厄は比較的に鮮少あるも、露本國を距る遼遠なるど、塞威嚴烈なるど、土地瘦惡なるどは露國積年の宏圖を阻遮する所多かるへし。然りと雖も英國の如き大海國兼大通商邦にして若し第十七世紀の末葉、極東に於て經營する所ありたらむには、露國か所銓克くし

能はざる速度を以て南方施設を大成せしなるへし。加奈陀の如きは一七六三年までは未だ全く英領と公認せられず、濠洲の如きも一七八八年までには一個の英領植民地も存立せざりしも、今日既に富盛なる植民地と豹變せしに非ずや。要するに露國が極東經營の遅々たるを免れざるは海事上の便宜を具有せざりしに由るや、彰々乎として昭也。

第十一 露國の東方經營と諸條約

現時露國は極東政局上、一個の近世的干渉邦を以て目せらるるに到れるか、オコック海濱に植民地を新設せしは一六三八年のことに屬し、英國に内乱起りし前四年に當れり、而して一六八九年ネルチンスク境界條約を清國と締結せしは、英國東印度會社がブラセー事變の結果として孟加拉を占畧せしに先たつこと六十有八年なりき。哥薩克騎兵がヤクツクより黒龍江に達せしは一六四四年也き、而して爾來紛争踵て起りしかば、清國人は露兵東漸に備ふる爲め黒龍江北邊に大兵を急派せり。一六八九年の條約是に於て締結せられ、アルガン及び

スタンノワイ山脈に沿ひオコック海に到る疆界線を協定せしか、一七二七年再び該條約を改訂せり。此疆界線は爾來久しく侵犯せられざりしか、露國人は黒龍江水利の便に垂涎し、ムラヅ・ヨフ伯が一八四七年東西伯利亞太守に任せらるるに及び、更に東漸の搜索を始め、一八五一年に至り、該江河口のニコラエウスク及びマリインスクの兩地境に「露米會社の貿易海港として使用せらるる爲め扶植せられたり」(地學協會會員イー、デー、ウフエンスタイン著「黒龍江に於ける露國人」參看)

一八五四年以降一八五五年に至る北太平洋同盟の海軍運動効を奏せざりしを以て、露國は之れか爲め刺戟を享け活動を試むるに至れり、堪察加及びニコラエウスクの二港は緯度五十四度に位し、海軍若くは通商用としては幾んど何等の價値なく、勢南方に伸張せざるを得ず、一八五八年五月十六日調印せし「通交並境界條約」に由り、黒龍江を以て疆界線とし、而して烏蘇里及び海に至る間は露清兩邦の共有地と宣言せられたり。(一八〇六年刊行「ケー、シー、ビー」サー、イー、ハーレット著「清國條約彙纂」參看)、二年後、即ち一八六〇年

十一月十四日北京にて調印せられたる條約に依り、烏蘇里を以て共通疆界線とし、裏鹽斯德は極東に於ける露國軍港と爲すを得たり。

第十一 裏鹽斯德と海軍軍港資格

此疆界線は今年に至るまで實際上變更する所なし。夫れ裏鹽斯德の位置たるや、冬季は氷鎖せられ、糧食は過半までは海上より供給せられ、且つ歐露には水陸俱に遠遯なる距離を有し、陸運は概ね實用に適せざるべく、復た一朝一個の大軍國と置を啓くの際は水運は必ず遮断せらるべきを以て、軍用上幾んど不完全の海港たるを免れず。故に露國にして英國若くは佛國と戦はば、裏鹽斯德は露西亞帝國中壊破せらるべき唯一の海港となるべし。サー、チャールズ、デルク一八九〇年揚言して謂らく、「クワミヤ戰役の際露國を惱ましめたる政策」か再び移して裏鹽斯德に襲用せられなば、同一の効を奏すべしと。是れ思はざるの太甚しきもの也。蓋し該海港の位置をして不安ならしめたるは交通の困難あるか、之れあるか爲り却て露國兵派遣の不便を來たし、全國の兵を擧げ之を極

東に送致し、敵の爲に壓殺せらるるの厄を免るるを得べし。否露國の兵家及び經世家は露國にして戦を挑まれずば、裏鹽斯德に於ては大利益を制して應戦することを得べしとの見解を懷けり、唯交通の困難を除去し、裏鹽斯德をして海上よりの襲撃を防ぎ牢固不拔の地たらしむるは、自ら道あり。歐露及び亞露を通貫緊約する鐵道敷設即ち是也。斯の鐵道の有無は眞に其の盛衰興廢の由て岐るる處なるを以て、經費の小大豈に顧みるに違あらむや。西伯利亞大鐵道は一八九一年を以て起工せられ、爾來拮据經營、事に従ひ、工事の進捗驚くべきもの有り、裏鹽斯德は此鐵道に由り、露國中樞と交通することを得るを以て復た敵の襲撃焦點なることを免るべしと雖も、海軍々港並に貿易港としての諸大缺點尙は依然として變せざるを奈何せむ。

第十三 旅順口の軍事形勢

露國か今や焦眉の急とする所は他なし、一八四二年英國か攫占せしか如き一個の暖水港を畧取すること即ち是也。特に日本帝國海軍か日清戰役後急速の進歩

を致せしを以て、支那海及び日本海の海上權力爭奪上、斯くの如き不凍暖水港の必需愈逼り來れり、西伯利亞鐵道は蜿蜒として長蛇の如く全滿州を周行せり。夥多の露兵既に裏鹽斯德に集中せられ、烏蘇里及び黑龍江の間は列宿の如く聯珠の如く屯營相望り。一朝清國解體の表徴顯はるゝに到らむ歟、他邦か兵力を以て抗爭するに非ずむは、滿州は直に露國の屬地となるへき耳、英國の一兵家の説に據れば、明治廿八年日本か遼東半島を畧取せむとせし際、露國か憂懼の念を懷きし事由は明々白々にして、之を史乘に徵し或は戰畧原則に照らすことを俟すして何人も直に首肯することを得たりしなるへし。之を以て之を觀れば露國か滿州を以て幾むと自家の領土とするの意あるや、復た疑を容れざるなり、權力區域、保護領土、用益權若くは屬地と公示するに至るは必然の事にして、今は唯早晚の時間問題となれる而已と。

明治二十九年即ち一八九六年露國は西伯利亞鐵道の北地彎曲通過を矯正し滿州橫斷線路を貫通するの許諾を清國より受理せり。獨逸國か膠州灣九十九個年永借權を獲るに及び、北清版圖の神聖茲に墜墮し、露國は竟に旅順口並ひに大連灣二十五個年間借入權を把持するに到れり。

英國現首相ソホルズベリー卿、一八九八年即ち明治卅一年五月四日アルバート館にて「運譽華義會」の集會に於て演説して曰く、「予は露國か旅順口を掌握せしを以て一大過失なりと思惟す」と。苟くも身海陸軍の軍職を奉するもの或は多少軍事智識を有する者は中外の差別なく、孰れも卿の立言の錯れることを認視することを得へし。由來露國は精覈ある海陸軍の智識を以て情勢を視察すること莫くして、濫に施設行動するか如きことなし。故に露國の經營法度の宜しきを失へるか如きことなきは史乘の證する所也。露國か永借地として借受けたる旅順口及び大連灣は刻下の状態にては未だ動力の淵源たるほどの地に非らずと雖も、今後西伯利亞鐵道の利便、哥薩克騎兵の集中、露國東洋艦隊の増勢、港灣防備の完成及び外交中樞と海陸軍との交通機關整備するに到らば、旅順口は十年を出てすして絶東のクロンスダット若くはセバストポールとあるへし。而して旅順口と裏鹽斯德とが相呼應して共同運動を試むるに到らば、宛も英國か威海衛と香港とを相通せしむると同一の力を獲へし。旅順口は裏鹽斯德に比

すれば、石炭、鐵、農産物等夥多なるを以て、後者よりも疆力なる海軍策源地となるや、復た疑を容れざるなり。

歐露本國か海上攻撃の危惧なかりし所以は他なし、波羅的及び黒海艦隊の疆大なるも、陸軍の無限優勢ありて其の背後に鎮することをも以てに非ずや。若し西海鎮を封鎖せむと欲せば、至適の艦隊を派出せば足るべし、然りと雖も豫期するたけの功を奏せむとせば、須らく大軍を帥む深く懸地に入り以て水陸兩面より共同運動を行はさるべからず、是れ歐洲諸強國の難しとする所以にして、攻るに難く守るに易き露國か歐洲政局に雄視する所以也。而して從來亞露の軍事形勢は歐露と正反對にして容易に海上より掩撃せば一舉にして撃破せらるべき危境に在りしも、今や既己に輕しく凌犯すべからざるものとなり、今後滋々然かなるべしとは、泰西兵家の斷言せる所也。裏蘆斯徳の如き數年前までは孤立の地位にあるのみならず、地方的利源極て寡少なりき、且つや縱令西伯利亞鐵道に由り幾多の兵員を輸送するも敵國海軍か海上より主戦力を此一點に聚致保續するものに頽頽すること能はざりしなるべし。成敗の數爛として星光の如

きもの有りき。今や則ち然らず、西伯利亞及び滿洲の富源一たひ開拓せば、極東に於ける露西亞帝國は魏乎として抜くべからず。極東に於ける露國海上權力か波羅的海及び黒海に於けるか如く擁立振興せらるるは、正に數年の後に在り。

第十四 露國海軍の攻勢方畧

露國海軍方畧はクリミア役以降一八八二年に至るまでは守勢なりしか如し。海防艦の建造せられたる隻數多大なりしのみならず、海軍なるものは主として海方面安寧の擔保の如く視做されたり。惟ふに是れ半は英國政府か露國を以て不倶戴天の仇讐とし、特に一八七七年乃至七八年に方り憎惡の意を示せしと、半は國民一般進歩の伴生物たりしか故なるべし。而かも今や斯の方畧は著しく革易せり。一八八二年以來施設せられたる大經營に徴し、復た昨年及び今年採用せられたる海軍擴張案を察するに、露國か其の海軍をして戦時攻勢任務を乘らしめむと勗むるの意彰也。露國の商船隻數は寡少にして年々歳々著るしき増加を視す、千八百九十八年刊行『政家年鑑』に據るに、一八九六年一月一日調査

露國登録商船は、汽船五二二隻、噸數二〇五、六四九噸、帆走船二、一三五隻、噸數三二二、三三九噸、汽船及び帆走船合計二、六五七隻、噸數五二八、九八八噸ありき。船舶隻數の約四分一は外國との通商貿易に従事し、殘餘のものは自國海岸貿易船にして、其の過半は露旗を掲揚せるも所有主は希臘人也。波羅的海に泛へる汽船は八十五隻、黒海及びアゾウ海には二百八十隻、裏海には一百八十一隻及び白海には二十八隻あり。

一八九六年露國諸海港並に高加索の黒海岸に航海せし二十噸以上の船舶は左の如し。

一八九六年	露國		外國		合計	
	隻數	噸數	隻數	噸數	隻數	噸數
入港の部						
白海	三三	四、三三	四七	二、六八、二二三	七八	三、一、三四
波羅的海	六〇	二、五、六四五	五、三六七	三、三〇、八四	六、〇三七	三、五、〇四九
黒海並アゾウ海	三〇六	四、五、〇八二	三、三三六	三、七、四〇、六九二	三、五、三三	四、一、五、七、七四

出港の部	露國		外國		合計	
	隻數	噸數	隻數	噸數	隻數	噸數
白海	三六〇	四、一、二三	四七	二、六八、二二三	七三三	三、〇、九、三六
波羅的海	七〇七	二、七〇、九七三	五、三六一	三、二八、五五四	六、〇六八	三、四、九、五、七
黒海並アゾウ海	二八三	三、九六、二五八	三、二二七	三、七、四七、〇九〇	三、五、〇〇	四、一、四、三、四八
合計	一、三、三六	七、三、八、五八	九、〇〇	七、三、九、七、九	一〇、三、三七	七、九、七、五、八七

裏海諸港は一八九五年中には船舶總噸數一五、六六九噸入港し、太平洋岸の裏鹽斯德には同年間に隻數一七一、噸數一九四、〇七八入港せり。

一八九五年白海、波羅的海及び黒海諸港に出入せし船舶隻數は合計三七、四二二ありとす。

是を以て之を觀れば、露國か一朝他の海軍國と戦を啓くの日、遠洋大海に存亡消長を賭し、敵邦商船拿捕艦の爲に捕獲若くは撃沈せらるるの慮ある海上貿易は比較的少額なりと謂はざるを得ず。故に露國海軍は自國海上商利を衛るの

重負なく、寧ろ其の交戦國海上商利を撃滅するの自由を有せり。加之のみならず、露國海軍は年々歳々伸張盈實せられ、所謂「義勇艦隊」なるものを編成し、「ツューリック」、「ロシヤ」及び「グロモボイ」の如き倔強の巡洋艦を包含せり。此「義勇艦隊」なるものは露國か將來他の海國と戦ふ戦鬪力中決して藐視すべからざる一要素にして、刻下合計十五隻を以て編成せられ、平時ハ商船の動作を爲すも、戦時には直に武装せられ、巡洋艦の任務に就役することを得へし。現時はオデッサ及び裏鹽斯徳間の定期貿易に従事し、兼ねて清國及び黒海間の茶交易及乗客搭載を事とし、復た平時には軍隊の輸送船となり、特にオデッサ及びパフォーム間を來往し補充兵及び豫備兵輸送の任に當れり。該義勇艦隊は一八八六年の創設に係り、初は同艦隊と國家との關係は緊密ならざりしも、今や露國海軍省の直轄に隸し、唯管理並に資本のみは艦隊にて自ら處辨せり。惟ふに露國か義勇艦隊を創始し、特に極東に其の主力を聚集せる所以のものは、平時に於ては自國の商利を増進し、戦時に於ては其の交戦國の海上商利を撃滅せんとするものあるへし。故に露國は商戦並に海戦に於て惧るべき要素を具有し、

今後滋々其の内容と外形とを整備するに到るべきを以て、宇内の海軍國特に極東の海軍國たる者は之に對應するの設備を怠らず、權力均衡を破らしむることなく、以て日本海、支那海及太平洋の海上權力を公正有効に分取持續するの道を講せざるへからず。

第七篇 海上権力の本義

馬鴻大佐著書梗概及論評

第一 何をか海上権力と謂ふ

第二 「海上権力史論」

マハン大佐が一八九〇年の交。自著『海上権力史論』を世に公にするや、歐米の能力ある評論家は、大佐に許すに、現存者中至高の海戦々畧論家を以てするのみならず、所謂海軍史哲學の鼻祖、木鐸を以てせり。大佐自序中に謂らく、「史家概ね海に對して特殊の興味、若くは專攻の智識を有せざりしを以て、海上の形勢に通せず、隨て大事件の成敗を決せしものは、深遠なる海上権力なることも雲煙過眼せり。海の効力及び海の管制權か古今宇内史上の一大要素たることを概論するは容易あるも、特種の時機に於ける海權の正確なる關係を探知するは難事也。然りと雖も之を明悟せしむは、大局の時務に通ずると能はず、恒に五

里霧中に徘徊するを免れず、是れ一定の時機に於ける形勢を分解し、以て正確なる結果の由て來る所を明にすへき特例を綜合せざるに基因す」と。英國海軍史の如き赫灼たる海軍史は天下他に有る莫し。而かも斯くの如き宇内萬邦か始て目撃せし最も顯著にして、且綿々として永く保持せられたる海權及び其勢力の實證たる、大海軍史を最も適當に祖述編次せし人あらず。マハン大佐は英國海軍史を哲學的、科學的に論述せる唯一の海軍史家也。英國古代の海軍史家中、適く正確なる史料を蒐輯し、事迹の基本まで論及辯破せし者なきに非らずと雖も、マハン大佐の如く海權に關し、非凡の活識を有せし者を視す。多くの史家は全然海權を藐視し、海權か邦家の興廢に何等の勢力を及はせしかを看過せり。唯輿論の本能及び經世家の政策のみは海權の爭奪に關し、措置の正鵠を錯らざりしに庶幾し。是れ蓋し輿論並に經世家か冷酷なる實戰の自然教訓に鑒み、深く省みる所ありて以て至適至公の方針を採りしに職因せずはあらざるなり。老ピットか大不列顛帝國を創創せしは、海權を利用せしに本つき、少ピットか敵邦外患を防ぎ、邦運を維持せしも亦海權擁立に基むせり。西歐列國中、那波

翁の爲に撃破せられさりしものは、獨り英國而已。而して竟に那波翁を殲刺せしものは、英國也。世人はウエリントンか佛帝を擠して洋心遠誦の孤客と爲せしことを知りて、未だウエリントンの功業か海權保維の一結果、海權の一機械に過ぎざることを悟る者は罕れなり。ウエリントンをして半島に上陸せしめ、陸軍を茲に駐屯せしめ遂に佛朗西を征服せしめたるものは、海權也。故に英國民衆かトラファルガアの英雄をしてアルトルオの英雄よりも更に高き榮位に陞らしめたるは敢て不當の判定と謂ふへからず。チルソンは英國國力要素の典型也、權化也。渠れは天縱の將才ある那波翁か移動せし大陸的兵力をして一敗地に塗れしめたり。チルソンか權化せし要素とは即ち海上權力なり。マハン大佐は斯の要素を精駁明悟し、而して之を敷衍せり。

惟ふに大佐は海上權力てふ辭を、タンディデスより藉り來りしものならむとは謂へ、其の深遠なる意義を會得し、之を闡明せし點に於ては、近世第一の論家と稱すへし。吾人かマハン大佐の著書より學ひ得たる所のものは他あし、英國の如く貿易的、膨脹的、及び海國的の邦國にとり、海上權力なるものは、嘗々

に獨り國方伸暢の一時的要素たるのみならず、復た邦家存立の基礎たること、及び苟も英國の如く盛大なる海國たらむと欲せば獨逸國か陸防に於て組織せられたる一國の陸軍に依恃すると同じく、海上權力に由らざるへからざることは也。人或は之を以て自明の理なりと謂はむも、誰か果して此自明の理の眞正の位置及び要義を、實際に適應し、之を宣明せし乎。小は一國の國史に對し、大は世界史に對し、此特種の視點より立論せし史家、果して幾人乎ある。博士アノルドはマハン大佐か論評せしものと同一の方法を以て、羅馬の爲めに殲滅せられたるハンニバルと、英國の爲に擊破せられたる那波翁との對照論を草し、サー、エドワード、クリュージは更に一步を進めて、是等の二大事迹の際、西班牙か大戦争の胚胎せし國たることを指摘せり。然りと雖も兩論者偕に對照論の眞髓的要旨とする所は戰捷者か掌握せし海上權力を論明するに非らず、海上權力掌握の戰捷の要素たりしことを主唱するに非らず。ベーコン亦曰く、「アクトイオムの戦争は世界を統一せむとする一帝國の運命を決し、レバントの戦役は古耳古人の膨脹を遏退せり」と、其の著想や正鵠を失はず、唯語て詳かな

らず。マハン大佐は百尺竿頭更に數尺を進め、借問して曰く、「東西の兩帝國か地中海に於て、年代を異にして二次、大戦闘を試みし際、特に其の第一次の如きは、世界に隠れなき一帝國か危急存亡の秋に陥りし時なりしか、敵射方の艦隊かアクトイオム及びレバントの如き彼此相近き二點に於て會戦せしは、一奇ならずや。是れ偶然に符合せし乎。將た循環して起るべき地利に基づき、將來復た循環して起るべき性質を包藏する乎」と、吾人の見る所を以てすれば、史家にして此暗合を注目し、之を説明せむを試みし者あるを知らず。此點に於てマハン大佐は前人未踏の新版圖を開拓せり。更にトラファルガアの海戦に於けるマハン大佐の評論は獨創出色の文字也。マハン大佐以爲らく、「ネルソンの光譽の冠冕たり、復た天才の章標たるトラファルガアの海戦を以て、偶然に起りし僥倖以上の盛事、詳言せば、無限の精察、準備の餘に成りし正當の大捷なり」と、斯く立論する者、世果して幾人かある。「諸艦は如何にして、恰も其處に聚合することを得べき乎」との戦畧問題を自問せし者、果して幾人かある。那波翁及びネルソンの二大將帥か相對抗し、遂にトラファルガア海戦を以て一年餘

に亘る大仕掛の戰畧的劇曲の最終の所作とせりと悟得する者、果して幾人かある。夫れトラファルガアに於て敗績せし者は佛西兩國聯合艦隊司令長官ヴギルヌーヴに非ずして、眞に那波翁其人也。戰捷者はネルソンのにして、英國は渠れの勳功に由りて國運を既倒に拯ひ得たり。是れ抑も何故ぞ。曰く他亦し、「那波翁の合縦艦隊運籌宜を失ひ、而してネルソンの本能及び猷謀、圖に中り、恒に英國艦隊をして敵の航迹を追躡することを得せしめ、以て決戰の際にて此情勢を保持せしめたり」とは、マハン大佐の斷案也。此理は、海軍戰術專攻の士にどりては容易に會得することを得る「いろは」同然のものなれども、當年、英國の才、一世に冠たりしピットすらも、之を悟らず。トラファルガアの戰捷に由りて、國人の意氣正に豪ある時、渠れはオーステルリッツの敗を聞き、心深く之を憂ひたり。塙地利は遂にオーステルリッツの敗に依り、自國の利害の點より去就を決し、戰捷者たる那波翁と和を講し、英國を擠して孤立の地に陥らしめたるにも拘らず、英國の勢威は之か爲め挫折せらるることなかりき。那波翁若しウギステユナ河畔に於て、印度を征服することを得むと壯言するの勇わら

は、渠れは先づ自家の兵力を知らざるへからず。而かもヴギルヌーヴがネルソンに破られ、再びカルデアに挫かれ、ブレストに駛せてガントオムと合すること能はず、復た英將コーンワリスが戰畧施設の異常の變易の爲め、佛將麾下の優勢艦隊を中斷し、各班をして英艦隊よりも寡弱のものとならしめたる時、那波翁の兵勢は既に英國海軍の好敵に非ざりしなり。那波翁記して曰く、「嗟呼、ヴギルヌーヴは、夫れ遂に千載の好機を逸せしめたり」と。渠れの斷定は其麾下の智謀ある諸海將よりも高健なりき。翁復た語を繼て謂らく、「ヴギルヌーヴは廓大に海上を展望し、而してブレストに乗りこみ來り、カルデアと迷藏を演しつ、直ちにコーンワリスを急撃することを得しならむ。或は自家の三十隻の戰列艦を率ゐて、カルデアの二十隻を邀撃し、全捷を占むるを得しならむ」、此時に到り、那波翁は積年の志たりし英國襲撃策を擲うち、直ちに令を傳へてオーストリッツ會戰の師を進めたり。事實より謂へば、英國はトラファルガア戰役前、既に拯はれたりき。若しヴギルヌーヴにしてネルソンに追躡せられ、追ひ超さるることなかりせば、トラファルガアの海戰は決して開かるることあ

らざりしなるへし。キルソンは成算我に在りとし、麾下の諸艦を一編將に托し、飄然故國に歸航せり。ヅギルヌーヴは怯懦と誤算の爲め、敵に數歩を輸し、復たもやロオジリーの爲に壓倒せらるるに到れり。佛國海軍評論家。那波翁を頌して曰く、渠れは固より海上の困阨多難に關しては、正確なる推測を下たすの素養を飲くと雖も、海陸の戰畧上、大局の打算に於ては、幾と遺算亦かりきと。那波翁はトラファルガ海戰前、自己の英國襲撃策の既已に蹉跎せしことを悟れり。渠れ一日、メテルニヒに告ぐるに、ブウローニユに佛軍を聚めしは、澳軍に備ふる爲めなることを以てせり。是れ或る意義より謂へば、牽制軍たりき。若し渠れにして一朝無難にブウローニユに於ける佛軍を提けて、卒然英國海岸に上陸し、且つや英國艦隊全滅せらるるに到りたらむには、澳國の敵軍復た渠れを煩はすこと能はざりしなるへし。而して一たひ目指す英國を征服せば、宇内の霸主たらむ者は、天下那波翁を措て復た誰かある、惜むへし、渠れかブウローニユの佛軍を以て變に備へ、之を以て鼓弓の副絃とせしは、トラファルガアの海戰に由り、渠れか恃て以て正絃とせるもの一朝キルソンの天才の爲に斷

たれしかの、翁の畢生の妙曲も竟に奏することを獲さりき。然りと雖も、渠れか塊に備ふるの兵を以て、暗中の飛躍を爲したるに止り、英國に對し攻勢的作戰を實施することを得ざりしも、之を以て夫のピットかオーステルリッツの敗を見て、トラファルガアの捷に償ふこと能はすとせしに比すれば、那波翁の眼高さやと千尺。

幾多の史家は英國海軍の偉績及び海に於ける英國不朽の英雄の堅信を青史に傳へたり。海軍中將コロムの如き英國海軍論家は、其の不朽の古海將の事迹を温ね、宏博にして不易なる海戰戰畧原則なるものを歸納立言せり。然りと雖もマハン大佐は戰畧よりも史學に深く、史學よりも戰畧に精に、而して史學的、戰畧的よりも更に哲學的也。世の所謂史家の輩は、海戰の諸情勢を最も明かに會得する時と雖も、之を以て歴史の趨勢及び列邦の盛衰を決するに足る至大の要素と認めざるのみか、獨立要素とも認めず。寧ろ陸軍戰術の補助的、附帶的要素と輕視するに過ぎず。マハン大佐は全然趣を異にし、更に多くの科學的、哲學的方法に由りて精研せり。大佐は海上權力を分解し、其の本源を分解し、其

の情勢を分解し、其の結果をも分解し、而して總ての分解を経て一定不易の海戦諸原則を綜合樹立せり。

第三 「佛國革命及帝國海上權力史論」

『佛國革命及帝國海上權力史論』は『海上權力史論』に次て著述せし第二著書也。而して全篇一千頁弱の大著にして佛國革命及び佛帝國を細評詳論せり。著筆せし時代、人物及び問題は、第一書中のものに比し、一層雄大、一層多變ありしを以て、前著よりも論旨も亦隨て興深く、且つ名教を含む。渠れの立論は精嚴渠れの畫幅は廓大、渠れの概括力は事變及び原則俱に卓雋也と謂て可也。本書は一八一二年を以て結尾とせり。マハン大佐、其の事由を説て曰く、『此時期は那波翁か露國を征討せし時にして、此遠征の爲め、那波翁は己れの帝國を覆滅し、否らすとも覆滅の表徴を招くに到りし時にして、他方に於ては、大英國及び合衆國との間に釁を生せし時也。後者に就ては、事、著者の生國に關するを以て、遠からず一問題として別箇に論述する所あるへし』と。其の後、マハン

大佐は第三著『チルソン傳、即ち英國海上權力之權化』てふ大著を起稿する爲め、現役を退き、該書刊行後、予が一昨年譯述せし『太平洋海權論』を編著し、刊行成るの日、米西戰役啓らけ、戰未た全く終らざるに先ち、大佐は宇内大勢の移推と合衆國の將來に關し、大に鑒る所ありて、直に筆を揮て『海上戰及其教訓』の稿を起し、英京倫敦「タイムズ」及紐育「マクルーア雜誌」に連載せり。一昨年即ち一八九九年萬國平和會議、海牙に開かるるに當り、大統領の命に依り、合衆國參列委員の一人となり、渡歐の途に上り、續稿を中止せり。歸國後、前論を完結し、更に一八一二年以降の海上權力論を草し、帆走船時代海戰の全貌を總論すへし。世界の讀書社會は斯の第一位の海軍論家の雄文に成れる大作に接するの日あるへし。

マハン大佐は佛國革命及び帝國戰史を論議するに、經世家及び將帥の着眼を以てせり。世の海軍史家は夫の六月一日の役、シント、ジャンセント及びトラファルガー、ナイル、コーペンハーゲンの諸海戰の偉勳を説くに止り、且つ是等の海戰か歐洲列國の兵力上の地位に及ばせし直接の影響を説くに止れり。渠等

は海軍と之に關聯する諸方面を忘れたり。一七九三年以降一八一五年に到る時期に於て、佛國革命及び那波翁の汎濫か全西歐を掃蕩し、遂に世界大洪水の深憂ありし際、超然として自國を此濁流狂瀾の表に置き、其の浸水横瀉の障壁となりしものは、英國海權なり。マハン大佐の從來何人も發見し得ざりし斯の大眞理を把握し、歐洲に於る第十八世紀より第十九世紀の初期に亘る大戦争の中心的戰史を稿せり。夫れトラファルガ海戰は、其の近き結果より視ても、終の結果に徴しても、近世史中至大の戰役なりしなり。而して終の結果に到りては、多年埋没して、之を看取する者殆ど有る莫し。唯纔に其の微光を認め得たりし者は、當年一人のピットありし而已。渠れ臨終に先つこと數日、一日パトネーの別墅に移るの時、壁上歐洲地圖あるを觀、傍人を顧て曰く、「其の地圖を撤し去れ、今後十年間は、無用の長物なれば」と。十年は俟たれざりき。若しピットにして壯時の堅信と卓識尙は依然として存し、復た深く自國の實力及び其の海權の大あることを洞觀したらむには、宇内の平和克復し而して歐洲地圖全く劃定する前に方り、當年既にウルクムに於て、オーステラルリッツに於て、

及び維納に於て、變亂將さに起らむとし、半島に於て、莫斯科に於て、將た又たワートルロオに於て、風雲生せむとするにも拘らず、渠れピットは一指を以てプウロニーニに於ける那波翁の營を抑へ、一指を以てトラファルガに於けるホルソン終焉の場所を衝き、叫破して謂ひしあるへし、「那波翁今茲に敗れたり。渠れの暴力、渠れの雄圖を阻遏するに足る障壁、今爰に築かれたり、此障壁たるや、英國か一國民として存立する間は、決して撤去することを得ざるべし」と。

此點に於てマハン大佐より明に、深く其の眞相を指摘せし史家あるなし。若し那波翁の英國襲撃策成功したらむには、英國は覆滅せざらむと欲するも、豈に得へけんや。而して英國を覆滅するの道は、歐洲諸邦を覆滅せしか如く、唯一の襲撃に由らざる可らず、那波翁は作戰の名將、固より英國艦隊を先つ殲滅せずむは、英國を一擧の下に席捲すること能はざることを明察せり。縱令此企畫か一方に於て碎挫せられむも、或る機會及び或る情勢に逢遭せば、敗を轉して勝となし、禍を轉して福となし、害を轉して利と爲すの成算なきに非ざりき、

マハン大佐之を揣摩して曰く、

「然りと雖も、那波翁にとりても成算の機確に存したれば、決して渠れの作戦計畫は架空の無謀ありと速断することを得ず。チンソンの天才あり、幕下海將等の耐久力ありと雖も、形勢一たひ變せば、佛國艦隊は四十隻以上の堅艦を卒然として英佛海峡に集中し、那波翁をして積年渴望せるか如く、纔に數日間、該海峡の全權を制せしむることを獲たりしや、未だ知るへからず。而して偵察艦隊をロシフォル及びフェロルより移し、以てカルダアかヅ井レヌーヴと戦ひし艦隊を編制せし一事は、其の運用巧妙にして、復た將才あることを示すに足ると雖も、隻數の點に於ては、英國海軍は十全なる安泰を保維するに足らず。否局面一たひ轉せば、決勝點に於て、運籌上、兵力上、敗者の位置に立つことを免れざりき。

佛國皇帝か其の英國襲撃計畫を重大視せしは、宜へなり。一勝一敗は人力の克く左右する所に非すと雖も、渠れにして大英國と對抗し、其の挫折する所とならば、是れ千日の功、一瞬に破るるものなり。渠れは本能的に之

を感得せり。渠れの後半の生涯を視は思半に過くる者あらむ。此一大海國と兵を交へしより以降、臥薪嘗膽の苦闘頻りに起れり。總ての戦勝餘光の裡に於て、十年歐洲大陸を征服せし盛事の裡に於て、佛國連捷軍及び幾多の補助軍か大陸の草木を風靡せし裡に於ても、絶へず聲なくして佛國の消長に對し、千鈞の強壓物ありて、其の頭上を蔽へり。而して觀察者は、其の強壓物こそ、真に一海國の活動てふ最も著るしく、最も悞るへき顯象あることを看破せり。此強壓物の下、歐洲大陸の財源の、年年歳歳、銷磨し去るに至り、那波翁は渠れの帝國全盛の位置に於てすら、常に缺乏を覺れり。

那波翁は此缺乏及び大陸條例厲行の爲め要する鉅額の費用を補充せむと欲し、幾多の專斷的條例を頒布し、人民をして敵國政略の羈絆を脱せしめむとして、却て人民の爲に虐主視せらるるに到れり、那波翁はトラファルガア以後、海國を窮蹙するには、大陸條例を除き、他に良策なしと信し、之を實施する爲め、自國の歳入及び信用を犠牲とせり。渠れか勢威赫々たる

の際と雖も、英國襲撃策蹉躓後、國運の安泰あることを感せしとありとは、蓋し虚ならむ。渠れか諸軍を糾合する前に方り、國民に演說せし時の渠れ自身の雄勁なる辭を引用せむ、曰く、「通商を失ひ、航海船舶を失ひ、植民地を失ひ、而して敵國の不條理の意志に屈從して生存するは、佛蘭西人民か忍ふへからざる生存也」と。然りと雖も、佛國は、渠れの治世間、制せむと欲して制すること能はざりし一敵國の意志の下に生存せり」と。

トラフルアガア役の海運上及び海軍戰畧上に及ぼせし結果並に二敵國か前後相踵て採用せし商策に就き、マハン大佐は極て獨創的、最も教訓的の立論をなせり。吾人は大佐の傑出の文字を擧げ、以て其の論旨の一斑を窺はむ。

「那波翁の英國襲撃策は、一度ならず、二度までも、實施上の困厄の爲め阻礙せられしか、遂に佛將ヴ・レヌーヴがプレストに達するの企圖を棄て、カヂスに向ひし時、全く齟齬するに至れり。佛國の盟邦にとり、トラフルアガアは無用無辜の大殺戮となり、悲運の佛國海將は、遂に自刃して怯懦の罪を償ひ、那波翁は積年の志望、一舉に敗れしを視て、痛憤激恚せり。

ヴ・レヌーヴは初より其の指揮の宜を獲ることを悟り、所銓好機あるも、勝を制すると能はざることを自覺せり。蓋し己を知り、敵を知るの明ありと謂ふべし。唯渠れの大過失は、服従てふ視易き職分を盡くし、縱令麾下の全艦隊を失ふとも、任托せられたる大設計の一部を果す爲め、萬艱を冒して猛進するの責務を盡さざりしに在り。渠れにして若しフェロル拔錨後、少しにても絶望の念を制し、以てトラフルアガアの役を來さざりしならむには、英國襲撃策は、萬一に非らず成功せしや、章かなり。

「然りと雖もトラフルアガア海戰の如き偉大なる事變は、人類にとり、總ての情勢の表證——更に重要にして、容易に曉り難き表證となれり。詳言せば、那波翁か英國を挫折するに、大陸との貿易を悉皆驅除するの方畧を以てせむと一決せし原因は、洵にトラフルアガアに在り。原因と謂ふよりも時期と謂ふこそ、寧ろ眞に庶幾し。是に至て大争鬪に於ける海上權の叙事は、嚴正ある意義に於ける海戰を尋ねることを廢し、而して從來海戰の附隨運動たりし敵邦商船破壊をのみ描寫するものとなりたり。該運動は那波翁治

世の晩年に至り、唯一の活動とならざりしも、主要の運動となれり。

「此問題に就ては、次きの二章を以て詳論すへし。一章には、通常の意義に於ける通商破壊問題を説き、洋上にて敵國の財貨を掠奪若くは焼失するの運動を叙し、一七九三年の戦役より筆を起し、佛國共和政府が英國貿易を破壊せむと欲して施設せし諸條例及び那波翁の伯林並にミラン勅令發布政策を胚胎せし趨勢を列叙すへし。次章には一八〇六年の伯林宣勅より始め、徐に佛國皇帝を驅て、蹂躙より蹂躙に奔らしめたる階段を紀し、而して是等のものか何か故に露國遠征及び佛帝國顛覆に到らしめたるやの所以を明示すへし。斯くの如く分明に説き去らば、夫の同時代の歴史をして一種の迷宮に踏みまよはしめ、其の出づる所を知らざらしむるか如きと亦く、佛國政府が前後相踵て施せし方畧は、一個の動機に由りて一貫し、一個の必要に驅られて出て來りし、一個の必至的結果たることを知るに足る。大英國破壊は其の動機にして、自國保全は其の必要也。兩國民は偕に敵の攻撃することを得ざる自國獨得の要素を待み、犯すへからざる堅堡の如く相對峙し、唯破るべきの道は、其の國力を涸らすに在り。斯の耐久の争闘に於て、那波翁は敗れぬ。」

吾人はマハン大佐の論題の博豊なると、其の着眼の新奇なるとに心酔し、主として『佛國革命及帝國海權史論』の大綱を擧げ、其の立論の輪郭を叙せり。渠れの戦畧上の評眼、海軍史哲學を道破せし卓識、及び海事文學の妙筆は、海戦上の専門家と非専門家とを問はず、近世海軍史家として第一位たるの榮冠をマハン大佐に捧ぐることを躊躇せざるへし。マハン大佐は、是れ等の宏績に加ふるに、戰術的道義を唱道し、且つ近世的海戦上、未だ解釋せられざる問題に對し、暗示的明光の洪水を漲らしめたり。吾人のマハン大佐の此大著を評するに中心的視點よりし直に基本的特彩を指摘せる點に於て、英國海軍評論大家サーズフホールド氏の見解に賛同する者なり。氏曰く、『マハン大佐を以て、思想の透徹、眼識の深遠、觀察の明靈なる點に於て、アダム、スミスと對比するは、溢美、誇張の嫌あきに非ずと雖も、大佐が『海上權力史論』の嶄新にして有益なる研窮に達せし精神は、此蘇哥蘭の大哲學家カウィニクス、オプ、ネーレンボレンズ『富國論』の研鑽に近きし精

神と相對比するの價值ありと斷定するは眞也」と。

第三 「英國海上權力の權化たるチルソンの傳」

始め合衆國海軍大佐マハン氏か『海上權力史論』及び『佛朗西帝國及革命期海上權力史論』を世に公にせし後、『チルソン傳』の著作に従事せりとの報、中外に流布するや、其の成功如何に就き疑惑の念を挾める人士鮮少からざりき。蓋し是れ至當の事也。史乘中空前の海將傳記の創作は、マハン大佐從來の史論上の著作と全然異種の著述に屬す。詳言せば、修史家の業と傳記家の業の自から異種の才能を要す。修史の才人必ずしも傳記の大家に非らず。是れ一は抽象的、他は具體的の業なるか故也。希臘の史家タシディデスと雖もペロポネシヤ戰史と同一の成功を以てベリクリーズ傳を大成することを得る乎否は疑問也。羅馬の傳記家プルタークと雖も其の英雄傳の如く羅馬民政史を不朽の著と爲すとを得る耶否は疑問也。『海上權力史論』を編かは、マハン大佐の修史上の概括力極て丕顯に、哲學上の推理力極て深遠にして、戰畧觀精嚴、批評眼亦清明なる

ことを識るへし。然りと雖もマハン大佐は海將の傳記者として、個人の品格及び行事の動念を看破するの鑒識、傳記家の必須闕如す可らざる同情、不偏不黨、好む所に阿ねらず、慕ふ所に枉けざる正中公明の精神を圓滿に發揮することを得るや。

惟ふに大佐の原著『海上權力史論』を通覽せる人士は、大佐か新著『チルソン傳』を公にせざる前に於て、海將の生涯及其の行事に關聯する醇粹の海軍事項を極て適切に、極て教訓的に論述するの技能あるを疑はず。復たマハン大佐か『大英國海上權力の權化』としてチルソンを精妙に叙述すること及び大英國並に歐洲大陸の政治及歴史上の錯綜糾紛せる諸難問を論明すること恰も快刀を揮て乱麻を裁つか如くなるべきことを疑はず。然りと雖も讀書社界の人士か疑惑を挾みし處は是れに在らずして彼に在り。他なし、マハン大佐は果して克くチルソンの瑾疵を併せ描き、人としてのチルソンの眞を直筆し、以て雷々に獨り不世出の將帥、將た智謀英武の海將たるのみならず、其の海戰不朽の偉勳は道義上の汚點と功過相償ふに足るや否を論斷するの筆あるや否即ち是也。

千八百九十七年四月即ち明治三十年四月、上下二篇より成れる浩漭にして踴雋なる『大英國海上権力の權化チルソン傳』出づるに及び、是等の疑惑は春氷の如く一朝にして融解し、マハン大佐の『チルソン傳』は爾來悠久に海事典籍中の一大寶典となるへし。

マハン大佐か一世の警語とありし『海上権力』の觀念を獲し由來及び此の文字を採用するに到りし理由は、大佐か知友マーストン氏に寄せたる書中に明かあり。大佐は同書中に自己著作の成功につき感ずる所を披陳せり。其辭に曰く、『予は著作成功の洪大なるを視て、自から驚きたり。足下は予の斯の言を聽て怪むへしと雖も、予は今日に到るまで、吾か成功を解せず。予は自から爲さむ欲せし所を爲せし而已。予惟ふに一大成功の譽を予に歸し、而して多大の識認を予に與へたる者は江湖なり。予は之を享け、之を樂み、而して之を謝す。然りと雖も予は時人か頌揚せらるるはと自著を評價するものに非ず』と。

吾人の觀る所を以てすれば、マハン大佐著書の眞價は其の成功の宏大なりしを以て十分ある説明とすることを得。然りと雖も大凡文籍なるものは、其大小如何に拘らず、時運の順逆に由り多少成功の程を異にするもの也。故に内容の良醇と時運の順境とは名著の成功を致す必至の要事也。マハン大佐の著書か偉大の成功を睹し所以のものは、洵に此の二個の要件を具備せしに在り。故サー、ジョオヂ、ツライオンの如きは大佐の著書を評して『未曾有の良著』と謂ひ、故コロム海軍中將は大佐を頌して『英國海軍に對し絶大なる寄與を捧げし人也』と云へり。以て其の内容の良醇あることを證すへし。而してマハン大佐の著書の出でし時は恰も英國の長く襟黙せる海軍的本能か覺醒せし際に方り、而して其の著書は英國國民に其の帝國史中の要訣及び精髓を顯示せり。マハン大佐著書内容の良醇を以てして、一載一遇の好機に際會す。其の聲譽の隆隆たる、固より其の數耳。而して第三次の著書たる『チルソン傳』か成功を致せし所以の事由も亦之に外ならず。

チルソンはマハン大佐か評せるか如く『チルソン以前チルソンなく、チルソン以後亦チルソンなき』か如く千古不朽の海將なるを以て、英國のチルソンと謂

はむより寧ろ世界のネルソンと稱すへし。故に『ネルソン傳』は世界に於ける英語讀書世界の愛誦する處となり、其の成功は世界的也と謂て可也。而も『ネルソン傳』の英國に於ける成功は特に明著なるを觀る。ネルソンの名は英國人の宇内に對する誇榮の一也。ネルソンに關する著書は英國人の無盡の興味を喚發するもの也。ネルソンに關して苟も一讀の値ある文籍にして失敗に歸せしものなしと謂ふは、蓋し宜哉。而してネルソンの品藻及ひ行事につき、今日の如く精駁に、清明に、公正に窺測推論することを得る良期は、ウラファルガア戰役以後有ること莫し。マハン大佐は此の便宜を專獲せり。加之のみならず傳記家の天才をも併有して此の大業を成せり故に縱令『海上権力史論』未だ世に出ず、復た英國人か海上権力の意義及ひ其の重要な所以を悟得せざるも、總て聰明なる論評家は『ネルソン傳』を以て古今未曾有の良著也と評定することを躊躇せざりしあるへし。

吾人はサッゼー著ネルソン傳を愛誦す。是れ其の文辭瑰琦にして。海將に對する同情の念亦深厚あるに由る。吾人は五年前刊行せられたるロオトン氏のネル

ソン傳を以て精讀の値ありと認むるもの也。マハン大佐か此の書を評して『簡約なるも精妙あるネルソンの傳記也』と謂ひしは、蓋し適評也。卷帙浩瀚なる『ネルソンの書翰文集』の如き、或は『エムマ餘録』の如きは、一讀の際英雄の風神を想見せしむるに足るもの有り。然りと雖も苟もネルソン傳の完璧を覓めむと欲し、海將たるネルソンを海軍戰畧家として攻究せむと欲し、渠れの智謀將才、偉動を知らむと欲し、渠れの蹉躓、汚點、幽愁を識らむと欲せば、必ずマハン大佐の雄篇『ネルソン傳』を精讀せざるへからず。

昔時英國の論客シエリダン、ギボンの『羅馬盛衰史』を評して『浩瀚大冊』と謂へり。予も亦マハン大佐の新著に對し同一の形容詞を冠せざるを得ず。大佐は海將の眞を寫すに大畫幅を用ゐたり。而かも其の畫題は之をして必要あらしめたり。ネルソンは千古一人の大海將にして、渠れに輸贏を決せし對手も亦史傑中の英將拿破翁第一世に非ず耶。而して後者に關する著作は極て衆多にして拿破翁文學と稱する一區域を專有するに非ず乎。然らば則ち前者も亦一大冊を有すへきは理の正に然るへき所也。カーライルはフレデリック大帝傳を草して

前後十卷の長篇を成せり。苟も北歐の大戦を統監し、而して近世的獨逸國の創建者たる大帝を傳ふるに斯の大冊を於てすへしとせば、英國を拯ひ、拿破翁を敗りしチルソンにして豈に二卷の史傳を多しとするの理あらむ乎。

マハン大佐かチルソンの人物を研窮せし方法は、極て獨創的にして、心象と行迹の二途より歸納綜合し、科學的方式、哲學的の推定を以て、チルソンを直寫細描せむと試みたり。其の方式の精深なる、其の推定の明徹なるは、マハン大佐の言辭を視て識るへし。

「大凡人の外形上の行爲につき、其の眞正の價值及び効力を識るには、其の直話よりも寧ろ前後の行事其物を分解的に研窮するを以て往往優れりとする事有り。而かも其の行事には嘗々に獨り其の行爲者の天稟の性癖冥冥の間に相參るのみならず、復た前人か唱道したる名論卓説、確持深信せられたる定理原則、感想及び推理作用の次序、鍊達して以て合理的信念と爲れる本能等の由來か混淆せるの痕を認めざるに非らず。渾て是等のものは人物の賦質及び氣品を欺罔して其の眞を掩蔽するもの也。而して是等の智

能に關する作用の原存及び暢達なるものは、其の人の遺稿を閲みすれば瞭然として彰かなるものにして、偶々其の行事を精駁して以て獲たる推論をして錯誤なきことを證せしむ。遺稿の行事に於けるは、恰も心の跡に於けるか如し。行事のみを以て人物を推判せむとするは、切開術の結果に專依すると同じき疑惑に陥ることを免れず。故に苟も遺稿と行事とを併せ觀は、切開術の結果と精神上の要素とを悟ることを得へし。遺稿にして既に外部の行事に對し斯くの如き干係ありとすれば、心象の經過、本性發作の形迹の如き、其の一生を陶鎔し、閱歷を潤色するものに至ては、其の關係の深微なる、蓋し知るべき耳。然りと雖も行事と遺稿との二者を以てせば、人物の眞を窺見することを得へしとするは非也。二者に加ふるに其の言語を以てせずは、人物論の最終至要の總合を完ふすること能す。蓋し機に觸れ事に接するの殺那に方り前後の情勢に拘らすして偶然に發洩せられたる言語は心情の秘奧を吐搥せしむるものなれば也。行事、遺稿及び言語は尤も善く自家の本領を表彰するものにして、苟も此の三者を併觀せば、錯

綜し時に或は氷炭相容れざるか如き諸種の性質を鑑識することを得、隨て諸種の性質より成れる人物の全豹を曉知することを得へし。然らば則ち此の三者は人物を辨識するの指南車と謂ふも不可なき也。而して言語及び遺稿に由りて識り得たる心内の一致と、行事に依りて顯はるる外部の不一致とを調和歸一せしむるに非らざれば、人物の眞を識ること能はず。吾人は諸友の顔貌を識別すと雖も、平生一人毎に相見るもの也。吾人若し欲せば、其の顔貌は個個別別に觀查し、彙類し、醜美を較量することを得へし。然りと雖も相識深き者に至ては是等の手段を要せずして、瞑目相起せば、其の面目自から眼前に髣髴たるものあるへし。傳記者の其の主人公に於けるも亦宜しく斯くの如くなるへし。夫れ傳記者の要務は其の主人公を曉知し、能く其の人物に親炙するに在り。其の一切の性情習癖を表明し、毫も隱匿掩蔽することなく、而して其の醇駁瑕瑾、長短明暗を公平詳密に對照比較して以て其の論定を誤ることなきを期し、虛懷平意に其の人と爲りを研窮し、深く察し審に考へ、先入主となれる誤謬を自刪し、其の心事と行迹に

照らし、以て冥冥の間に其の人物の眞を心識すへし。夫の徒らに不完全なる透鏡を以て物象を窺見し、其の輪廓をして斜曲せしめ、若くは形體をして朦朧ならしむるか如きは、吾人の探らざる所也。

チルソンの人物を論評する著作資料としては、渠れか躬から呶せし浩瀚にして雜種の遺稿の存せるものあり。固より不完全を免れずと雖も亦豊足なる資料と謂はざるへからず。著者の目的は、第一、此の資料を參稽して、チルソン其人の肖像を盡き、風神躍如として眞に迫り、恰もチルソンか興に乗し意に任して自から畫けるか如くならしめむとするに在り。而して讀む者をして日ごとに渠れの磬咳に接して以て其の人物に親炙せしむるか如く、チルソンに近邇し以て夫の瑾疵相參り、不滅の汚點と不磨の高義と相混し、而かも萬人を惱殺するに足る渠れの眞情を知悉せしめむと欲す。第二の目的は第一の目的に比すれば

他なし、攻戰の偉勳を樹て、英國第一流の海將たる武人の傳記を叙述し、以て天與の將才と風雲の時勢と相俟て、赫赫たる戰捷並に其の結果を致さ

しめ、竟に開闢以來の絶大至高の海上權力の代表者を出さしめたる所以を
闡明せむとするに在り」と。

17/2/35
日露海軍の將來終

明治三十四年六月廿九日印刷
明治三十四年六月廿八日發行

定價六十錢

著者 水上梅彦

發行者 東京市京橋區采女町二十四番地 福永文之助

印刷者 横濱市太田町五丁目八十七番地 村岡平吉

發行所 東京市京橋區采女町二十四番地 警醒社書店

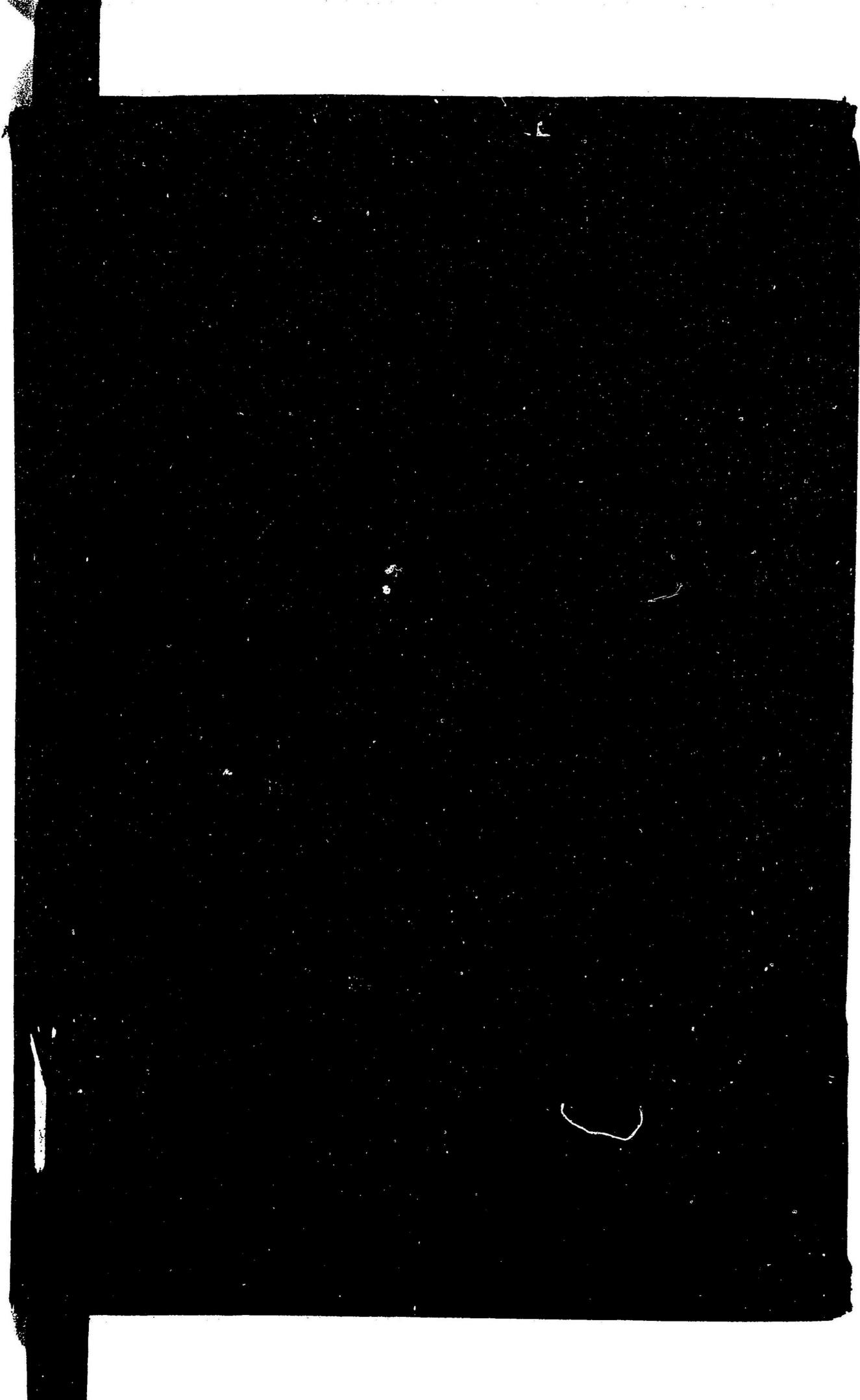
印刷所 横濱市山下町八十一番地 福音印刷合資會社

不許複製

帝國主義	幸徳秋水著	郵定價	四十五錢
興國史談	内村鑑三著	郵定價	四十五錢
地人論	内村鑑三著	郵定價	六十錢
修養錄	松村介石著	郵定價	四十錢
大日本青年 精神的教育	松村介石著	郵定價	四十五錢
リービングストーン	有島武郎合著 森本厚吉著	郵定價	四十錢
シーザル傳	松本君平著	郵定價	四十錢
コロンブスと彼の功蹟	内村鑑三著	郵定價	四十六錢
羅馬亞 侵略者拔都大王並金黨史	酒巻監著	郵定價	三十錢
基督傳記	竹越與三郎著	郵定價	二十五錢
人物論	松村介石著	郵定價	三十錢
社會改良家列傳	松村介石著	郵定價	三十錢
アブラハム倫古龍	松村介石著	郵定價	二十錢
ガープ井ールド傳	西武雄著	郵定價	四十五錢
子ルソン傳	月川殘花著	郵定價	二十八錢

英國今日之社會	片山 潛著	郵定價	八十五錢
天道	松村介石著	郵定價	二十五錢
愛吟	英和對照 新体詩歌 内村鑑三譯	郵定價	二十五錢
人道	松村介石著	郵定價	二十二錢
外國語之研究	内村鑑三著	郵定價	二十五錢
英語大成	獨立雜誌社譯 上製郵定價五十五錢 地製郵定價四十五錢	郵定價	四十五錢
日本と露西亞	島田三郎著	郵定價	三十五錢
附錄 殖民新論 對清意見 朝鮮經營論			
外交官領事官制度	源 敬著	郵定價	二十錢
露清關係	大坂毎日新聞記 者録岡澤士譯	郵定價	三十五錢
伊太利一統史	松村介石著	郵定價	二十五錢
英雄崇拜論	カール・ライル著 住谷天來譯	郵定價	五十錢
警世雜著	内村鑑三著	郵定價	三十錢
後世への最大遺物	内村鑑三著	郵定價	二十五錢

91
28



91
28

052744-000-2

91-28

日露海軍之将来

水上 梅彦/著

M34

BFH-0233



